

瑞泉鍛刀所百年の歩み

100 Years of the Zuisen Japanese Sword Smithy



刀匠銘：胤匡 堀井 重克
Shigekatsu Horii
(Pseudonym as swordsmith: Tanetada)

要 旨

瑞泉鍛刀所は平成 30 年(2018 年)に開設 100 周年を迎え、また、開設以来当主を受け継いできた堀井家以外から初めて当主が誕生した。

これを機に、刀鍛冶堀井家の系譜と瑞泉鍛刀所の歴代当主を紹介したうえで、瑞泉鍛刀所 100 年の歴史を、歴代当主にまつわる話題を通して振り返る。

— Synopsis —

In 2018, the Zuisen Japanese Sword Smithy celebrated its 100th anniversary, and the position of the head was taken over. The new head is not a member of Horii family. This is the first time that a non-Horii family member has become head of the sword smithy since its establishment.

On this occasion, we look over the swordsmiths of the Horii family and the heads of the sword smithy from the past to the present. Then, we look back on the 100 years of history of the sword smithy through the topics relevant to the heads.

1. 刀鍛冶堀井家と瑞泉鍛刀所の歴代当主

大正 7 年(1918 年)に開設された瑞泉鍛刀所は、平成 30 年(2018 年)で開設 100 年になりました。瑞泉鍛刀所の歴代当主にまつわる話題で歴史を振り返るに当たり、参考として刀鍛冶堀井家の系譜と瑞泉鍛刀所の歴代当主を紹介します。

刀鍛冶堀井家の初代堀井胤吉は生涯独身でした。二代胤明は胤吉の甥で養子として胤吉の弟子となります。胤明は結婚しましたが、男子に恵まれませんでした。三代俊秀は堀井家の遠戚で胤明に入門した時は兼明、大正 2 年(1913 年)に秀明と改名、昭和 9 年(1934 年)に俊秀に改名しました。俊秀は二人の男子に恵まれました。四代信秀は俊秀の長男です。信秀は男子に恵まれず、日本製鋼所を退職後、伊達市に移住し鍛刀所を建てて独立したのを機に弟胤次は分家初代を名乗りました。昭和 47 年(1972 年)に胤次の長男重克が日本製鋼所に入社し現在は分家二代となりました。

瑞泉鍛刀所としては秀明(俊秀)が初代当主で大正 7 年(1918 年)～昭和 18 年(1943 年)、二代目当主は信秀で昭和 30 年(1955 年)～昭和 51 年(1976 年)、三代目当主は胤次で昭和 52 年(1977 年)～平成 14 年(2002 年)、四代目当主は胤匡で平成 15 年(2003 年)～平成 30 年(2018 年) 11 月まで当主を務めました。そして現在は、佐々木胤成が五代目当主を務めています。

佐々木胤成は平成 10 年(1998 年)に室蘭工業大学を卒業して日本製鋼所に入社し、三代目当主胤次の下で修業しました。平成 15 年(2003 年)に刀匠の資格を取得し作刀技術の研鑽に努め、平成 30 年(2018 年) 11 月から五代目当主として瑞泉鍛刀所を継承しています。

以下では、瑞泉鍛刀所が茶津山中腹に建設された経緯から現在の五代目当主佐々木胤成に至るまでの歴史を夫々の当主の主だった話題でつづてみようと思います。

2. 瑞泉鍛刀所の開設

明治維新で廃刀令が發布され日本刀は無用の長物となり大正期にかけて洋式兵器の台頭と相まって衰退の一途を辿ります。このような事態を憂いた当時の宮内省が鍛刀技術の保存と刀匠擁護を大手企業に向けて呼びかけました。

日本製鋼所は明治40年(1907年)に国策による日英合弁の民間兵器製造会社として創業しました。創業からの11年間で業績は何とか右肩上がりに推移してきました。当時の重役の中に刀剣保存会の会員がいたこともあり、日本製鋼所は宮内省の呼びかけにいち早く名乗りを挙げました。

また、当時の室蘭には、水谷叔彦室蘭工場長、研究所の蒔田博士、内科医の佐藤富太郎氏など刀剣に造詣の深い方々がいました。

宮内省と折衝の末に東京の羽澤文庫鍛刀所がかつて仕事をしていた堀井胤明、秀明親子が招聘され大正7年(1918年)7月、室蘭に家族共々移住して来ました。茶津山の中腹に鍛刀所が建設され、同年8月7日に室蘭八幡宮の佐藤宮司による厳かな火入れ式が執り行われ瑞泉鍛刀所が開設されました(写真1・2)。

胤明は病弱で室蘭に移住してからは鍛刀の実演だけで実際に作刀はしていませんが、秀明の後見人として存在感を示していました。瑞泉鍛刀所では養子の秀明が当主として精力的に仕事をしていました。日本製鋼所は当時民間の兵器製造会社だったので皇族や軍関係の視察が多くありました。その度に胤明は装束を身に着け先手(さきて)を相手に実演を披露していました。その時には秀明が説明役になって来客に対応していました。

大正7年(1918年)当時は現在の資料館の場所に鍛刀所が建っていました。仕事場の入口は大門から入ってきて現在の仕事場の研ぎ場と万力台の中間にありました。入ると右手に部屋があり、そこにはテーブルがあってその上に作刀工程雛型が展示されていました(写真3)。来客はその部屋から作刀風景を見学していました。

鍛錬は常に刀匠と3名の先手で行われていました。火床(ほど)の脇では控えの先手が待機していました。皇族の方が視察に来られた時に御前鍛刀された作品は後日、献納されていました。資料館に展示している4冊の押し型集にはそれらの作品も掲載されています(写真4)。

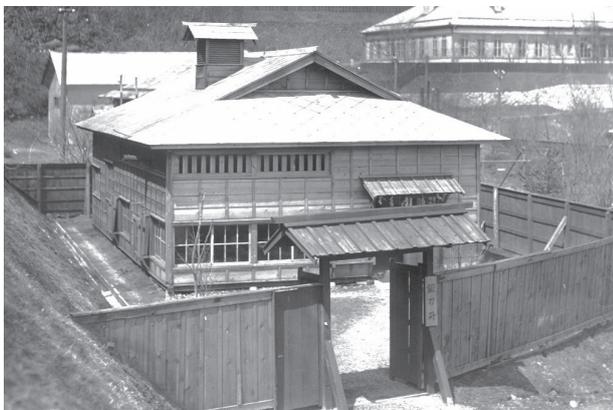


写真1 大正期の瑞泉鍛刀所



写真3 作刀工程雛型を前にする秀明

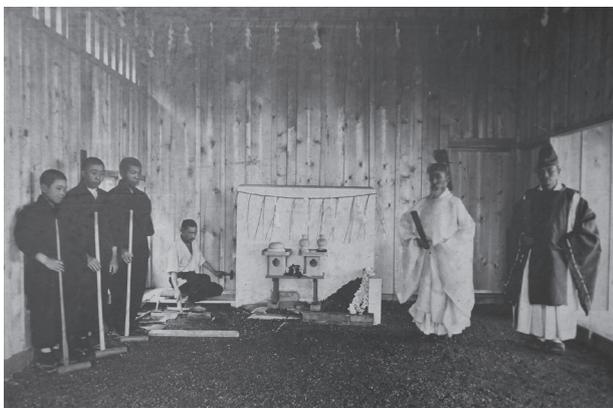


写真2 火入れ式



写真4 押し型集

3. 初代当主 堀井秀明 (俊秀)

瑞泉鍛刀所初代当主の秀明は明治19年(1886年)3月2日、滋賀県の比叡山の麓、下坂本村の徳田廣吉の三男として生まれ幼名を兼吉といます。堀井家の遠戚にあたります。明治34年(1901年)、堀井胤吉の弟子で農具鍛冶の松田胤勝に入門し農具鍛冶の修業を始めます。

明治36年(1903年)に胤吉が亡くなり二代胤明が苦勞しているので手伝うよう促され胤勝の勧めで明治37年(1904年)に上京し、高輪の三宮男爵邸内の胤明に入門しました。その時に遠戚だったため「胤」の字を遠慮して「明」の字をもらい、自分の名と合わせて兼明と改名します。

しかし翌明治38年(1905年)8月14日、お世話になった三宮義胤男爵が逝去されました。奥様が外国人で刀剣が嫌いだったため、胤明は初七日を待たずして御用刀匠を辞しました。兼明も胤明と共に三宮邸内の鍛刀所を引き払いました。その後兼明は胤明と親交のあった桜井正次刀匠を頼って鎌倉の瑞泉寺にあった鍛刀所に世話になりました。

明治44年(1911年)、兼明は師匠胤明と共に東京羽澤文庫にある高瀬羽卓代表が開設した鍛刀所に招かれ胤明と共に作刀に専念します。この年に兼明は胤明の養子になります。

大正2年(1913年)11月18日、兼明は刀剣保存会より「宜しく秀明と改め称す可し」との命を受けました(写真5)。初代堀井胤吉は月山貞吉、大慶直胤両刀匠に就いて修業

しました。二人共水心子正秀の弟子でした。その流れを汲む胤明の弟子ならば、現在の岐阜県で派生した美濃伝の刀工が専ら使う「兼」の字は相応しくないという理由で改名させられたのです。

翌大正3年(1914年)9月に秀明は胤明の三女「寒」と結婚し二男二女を授かりました(写真6)。大正4年(1915年)10月1日、羽澤文庫での鍛刀技術を高く評価され「志賀太郎」という匠号を贈られました。

大正6年(1917年)頃には羽澤文庫の鍛刀所は資金調達が滞り経営に行き詰まり、また胤明の体調も悪化して再起も危ぶまれる状態となり、大正7年(1918年)に入っついに閉鎖されました。秀明は仕事をやる場所がなくなり困惑している時に日本製鋼所に招聘され室蘭に移住して来ました。

瑞泉鍛刀所では、開設以来毎年、正月二日は打初式を行い早朝から鍛錬を始め陽が昇り明るくなる頃に仕事を止め、弟子を囲んで正月料理を食するのが恒例でした。秀明は作刀に専念するばかりでなく、上京しては刀剣会の会合で重責を担っていました。また当時は陸軍主管で軍刀を専門に造る集団、その軍刀造りに異を唱え古来の製法を尊重する集団、それに愛刀家が純然と鍛刀技術と刀匠の擁護を求めた集団があり、胤明・秀明親子は3番目の集団に属し、尚且つ日本製鋼所の社員という特殊な立場で刀剣社会において活躍していました。

大正14年(1925年)5月26日、旭川の第27連隊付生田吉五郎氏からの注文で大太刀が製作されました。当時三振り製作され二振りを研ぎ、出来の良い方を納品し残った作品は昭和9年(1934年)の帝国美術展覧会に出品しました。もう一振りは少し疵が出て荒身のまま今も仕事場の刀掛けに掛けられています。昔は弟子に入ると腕、腰を鍛えるために皆がこぞって振っていました。

この大太刀の注文を請けた時、大きな紙に原寸大の図案を記したものが添付され今でも現存しています(写真7)。

図案の一番上には「鍛刀形寸法書 實沕大」と記され、その横に鍛刀目的として「一、終生心身鍛錬ノ事、一、

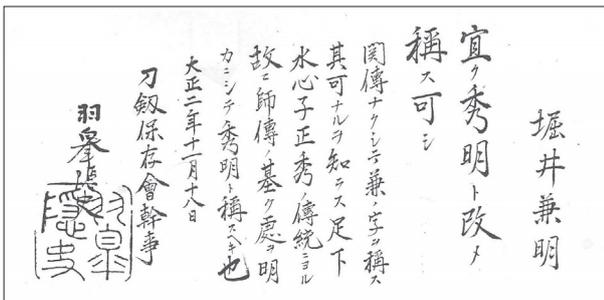


写真5 兼明への改名通知書

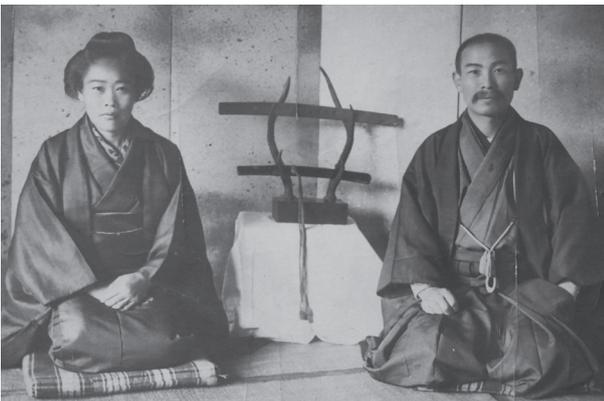


写真6 寒と秀明

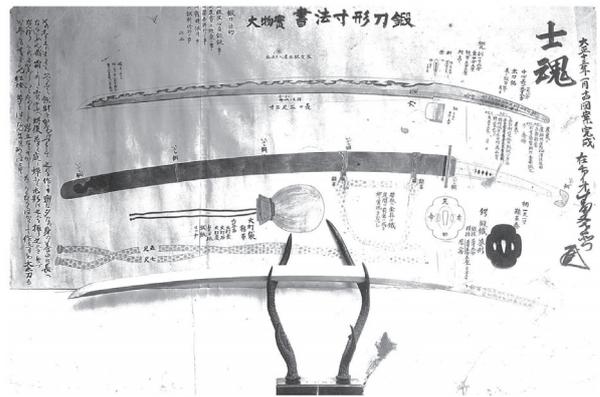


写真7 大太刀と図面

正貧之標象ノ事、一、居合修行ノ事、一、戦時佩用ノ事、一、試斬修行ノ事」と記されています。

また、左端には縦書きで次のような文章が記載されています。「その志の元にまうさく、かへりなば、餘財をかたむけつくして之れを作り、朝な夕なの身の養ひに長へならしめん哉、霜のあした雪のゆふべ將復花さく庭に蟬なく木影に之れを振り之れを愛づ、なんぼかうれしかるべし、いとたのもしき思立なるぞかし、たゞうらむらくは、かくして作るべきこの大太刀も、いく久しくもすぎざらん紅燈之夢とはてなんその日のあらばこそ」。

大太刀の茎(なかご)に刻まれた文字は、表銘が「秀明 應羽州庄内田澤住生兵部尉需 於室蘭日本製鋼所鍛之」、裏銘が「大正十四年五月祝日 以兵部尉之終生鍛鍊心身尚戦時佩用之平時爲正貧標象也」となっています(写真8)。

現在この大太刀は見学者に「特別な大きさです」と言って持って頂き、皆さん重さを体験して一様に驚かれています。

昭和4年(1929年)、秀明は仕事で鳥根方面に出張した際に伯耆国(ほうきのくに)産の鉾(けら)を見つけて買い付け、それが室蘭港に陸揚げされました(写真9)。



写真8 大太刀の押し型



写真9 伯耆国産の鉾

その鉾を砕いて採取した玉鋼(たまはがね)は私が入社した昭和47年(1972年)当時にもまだ少し残っていました。昔の玉鋼は見た目通りで加熱してヘシ金にしてもとても良くまとまりました。

昭和3年(1928年)から秀明は三笠刀の製作を始めています。旗艦三笠は造船史上価値の高い船舶として認められ大正15年(1926年)に記念艦となりました。平成4年(1992年)6月に英国の世界船舶基金から海事遺産賞を授与されています。この艦は英国ビッカース造船所で進水し砲身はアームストロング社製でした。両社共に日本製鋼所創業当時の出資者でした。その関係で室蘭製作所に砲身が運び込まれ、当時名を馳せていた秀明の手によって長・短剣が製作されました(写真10)。



写真10 三笠の刀身彫り押し型

三笠刀について書かれた当時の新聞記事がありますので、そのまま掲載します。

「・・・之より先豫て当社鍛刀所作品の優秀なることを認められたる東京水交社々監、石本久萬男氏は日露の海戦に皇国の興廢を此の一戦と決したる旗艦三笠が戦役中搭載せし12吋主砲砲鋼を主材とし海軍用長短剣を鍛造し以て関係希望者に分与せば好個の記念品たるべしとの主意にて之が製作を依頼せられ当社は無上の光榮とし右砲鋼の支給を受け昭和3年1月以降、秀明を督励し之が製作に着手し、同7年5月迄に下記の長短剣を謹製せり、三笠長剣：279口、甲号三笠短剣：973口、乙号三笠短剣：451口計1,703口斯くして北海道の一角に日本刀鍛造の復興を見るに至りたるは多大の犠牲を拂いて之が維持改善に努めたる当社の面目は勿論那家の為誠に欣賀に堪えざる次第なり

『三笠』の大砲で日本刀三千口『皇国の興廢此一戦にあり』と刻んで日本海海戦に有名な軍艦『三笠』が海戦当時敵艦を撃沈した大砲を保管して何とか殊勲を立てた面影を記念したいものと海軍で研究中の処、12吋の副砲を

室蘭にある刀剣界の権威瑞泉氏に見せた処、立派な日本刀が出来るといので短剣 1,000 口、長剣 2,000 口を砲身で作ることとなり、その見本が水交神社に奉納する一組と安保海軍大将に一振とを送付して来た。長短剣には何れも『皇国の興廃此一戦にあり』が刻まれている。昭和 3 年 2 月 17 日 函館新聞

また、秀明直筆の履歴書に三笠刀に関する記述がありますので抜粋します。

昭和 2 年 11 月 25 日 東京水交社内水交神社奉納品、長剣 2 振、短剣 2 口を謹造、三笠艦砲身の材料を以て短剣 300 口、水交社注文の命あり
 昭和 3 年 2 月 14 日 全右砲身を以て日本刀を謹造の為、全国の各新聞に大々的記載
 昭和 3 年 3 月 7 日 横須賀鎮守府司令長官安保清種閣下来観
 昭和 3 年 4 月 1 日 米国ロスアンゼルス市愛刀家小島伊三郎氏来場、特に三笠砲鋼を加えて 5 振注文せられたり

三笠刀は作刀方法によって次の 2 種類に分けられます。

その 1 砲身をそのまま鍛伸し適当な大きさにして火造りをなし形を整え、焼入れを施して作られたもの。水交社の主意に副って作られたもので作風は下記の通り。

長剣 長さ：2 尺 2 寸
 短剣 長さ：7 寸 5 分
 刃文 直刃
 表銘 三笠、以三笠、以三笠砲鋼、以軍艦三笠砲鋼
 裏銘 秀明、秀明作、源秀明作

その 2 砲身材と和鋼(玉鋼)を混ぜ、または砲身を卸し金などで加工し玉鋼に加えて古式鍛法により鍛錬を施したもの。別注文で作られたもので作風は下記の通り。

長さは注文者の希望で太刀・刀・短刀と種々あり
 刃文 乱れ刃(直刃は少ない)
 表銘 加三笠砲鋼、加軍艦三笠砲鋼、以三笠艦砲身作之、加和鋼以三笠砲鋼
 裏銘 秀明作、源秀明、瑞泉源秀明、瑞泉源秀明精鍛、・・・謹作

前掲した当時の新聞記事にある 1,703 口よりも台帳の記載は少ないので、恐らく作刀方法その 2 で作刀したものがそれに当たるのではないかと父胤次はその記録の中で推測しています。

昭和 6 年(1931 年) 7 月以降は茎に三笠と刻み、日本製鋼所の社章を刻印して秀明銘は刻んでいないものもあります。7 月 31 日付けの本社秘書からの手紙には、「長剣 11 振、短剣 57 口を秀明銘を入れず、社標を刻す弟子に打たせてもいいので日本製鋼所の信用のためにも早急に。その後に短剣 50 口、更に 50 口ある筈とのこと。鍛刀所の経費を捻出するためにも水交社からの注文は海軍に対しての信用上からも極めて大切である」と書かれています。

当初は張り切って製作していましたが、追加追加に追われ、それが鍛刀所の経費捻出のためとは分かっても数打ち物を作っているようで最後は嫌になってきたことが窺える本社とのやり取りもありました。海軍兵学校士官候補生向けの短刀だけでも 109 口分の押し型が掲載されています(写真 11)。

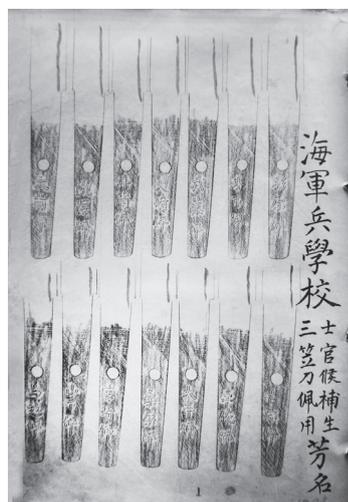


写真 11 三笠の短刀の押し型

昭和 8 年(1933 年)の暮れに現上皇陛下がお生まれになり明仁親王と命名されたのを受け、明の字を刀匠銘の下に使っていることを不敬に感じた秀明は、翌昭和 9 年(1934 年)の正月に俊秀と改名しています。「畏れおおいから」と言うだけで多くは語らなかったそうです。

俊秀は刀鍛冶になって三度刀匠銘を変えています。室蘭に移住して秀明から俊秀になって亡くなるまでの 25 年間に 3 千振りほどの刀剣を製作しています。年代と刀匠銘が合わなければ偽物と判断出来ます。数多く製作しているので偽物も結構存在します。

昭和 15 年(1940 年)、この年は紀元 2600 年に当り国を挙げて奉祝ムードでした。日本製鋼所は海軍関係の仕事をしていたため、神戸の湊川神社の境内で御神前鍛刀奉仕の話が来ました。10 月に決定され 11 月 12 日に俊秀と弟子 7 名が同行して 1 週間で太刀 2 振りを仕上げました。この時の奉仕者は堀井俊秀、中尾三治郎(忠光)、渡部工(保秀)、長男正光(信秀)、藤田強(忠次)、沼澤竹

雄(俊光)、長谷川二郎(俊長)、次男胤次の8名で、当時の丸一左門秘書課長が同行しました(写真12)。短期間での製作に合わせ先手4名での鍛錬の練習をして本番に臨んでいました(写真13)。



写真12 湊川神社神前鍛刀奉仕者

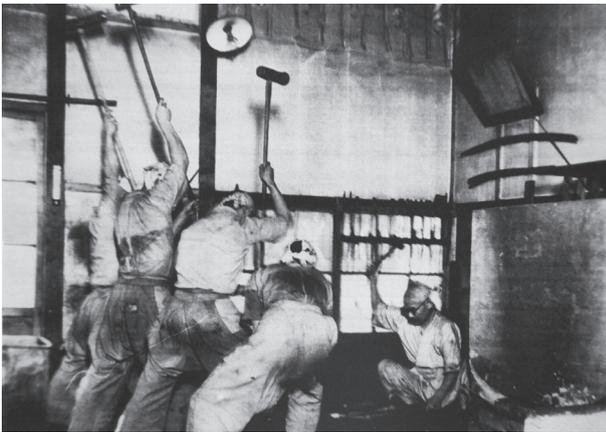


写真13 神前鍛錬の練習

この湊川神社は刀鍛冶堀井家の初代胤吉が最初に入門した月山貞吉刀匠の御息貞一刀匠からの誘いで明治18年(1885年)の550年祭で神前鍛刀奉仕の先手をした場所です。そのことを胤明から聞いていた俊秀は昭和10年(1935年)の600年祭に神前鍛刀奉仕をしたい旨を会社に願っていたのですが(写真14)、御神剣奉納に留まった経緯があり、この紀元2600年の御神前鍛刀奉仕は俊秀積年の想いがありました。押し型集の通し番号によると1382から1386の5口が掲載されています。最後の1口には昭和15年(1940年)11月23日、午後4時45分、高松宮殿下神前へご参殿放遊後に鍛刀場にお越しになり御前鍛錬をしたのでそれで小鳥造り(こがらすづくり)にして神社より献上予定と記載されています(写真15)。

昭和17年(1942年)正月15日、俊秀は本間順治先生が進められていた満州国建国十周年記念謝恩刀製作の打合せのため上京しました。これは満州国が建国されちょうど十周年を迎えるにあたって満州国産の材料で製作し満州国皇帝より謝恩の意味で我が国の天皇に献上される

ものです。しかし結果的に献上出来るような作品が出来ずに国内の刀匠に作らせることになり、人間国宝となった高橋貞次刀匠の他に俊秀にも下命されました。1月20日から2月10日まで22日間で3振り製作し内2振りを完成させて資料館にはその時の控えの1振りが展示されています。高橋刀匠は1月22日から2月13日までに2口完成させ両刀匠の1口ずつが2月25日研ぎ上がり本間順治先生が3月6日に渡満し満州国皇帝に御覧に入れご満足頂き、同17日に昭和天皇にご贈献なされました(写真16)。俊秀はその祝賀会に招かれ記念品を頂戴して帰蘭し、弟子達もそのお裾分けに預かりました。

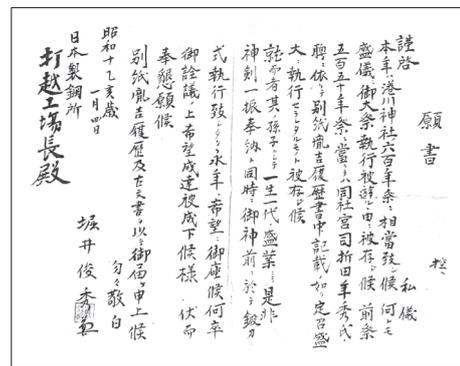


写真14 俊秀の願い書



写真15 小鳥造りの押し型



写真16 満州謝恩刀の押し型

昭和18年(1943年)4月、本間順治先生のお口添えで伊勢神宮式年遷宮(昭和28年〔1953年〕)のための刀剣製作依頼の連絡があり、俊秀はこれが最後のご奉公と心に決めました。6月1日、御神剣についての打合せのため内務省神宮御営局に出頭するも製作が中止となり代わって宮内省調度局より委細ご説明承り元帥太刀5口を下命拝受しました。

元帥太刀仕様：長さ2尺4寸7分、茎5寸2分、反り6分、元幅8分2厘、元重ね2分2厘、先幅5分4厘、先重ね1分3厘、中央幅7分、重ね1分6厘、重量が135匁以内

俊秀は室蘭に帰って速やかに謹作を始めました。お弟子さん達を集め「この元帥刀を作ったら私は死ぬ、刀匠としてこの元帥刀を製作することは最高の榮譽であり、渾身の力と技をもってこれが完成に打込む」と言明しました。この時、信秀は戦地におり、胤次他数名の弟子が俊秀と一緒にいました。胤次は元帥太刀の雛型を見せられた時、身の引き締まる思いでした。身幅(みはば)狭く、重ねも薄く長さが2尺4寸7分もあり、表裏に薙刀樋(なぎなたひ)と添え樋があり、その留めの部分から区(まち)まで7分位の空間があり、その部分に菊花御紋章が入ると教えられ緊張は更に高まりました。俊秀は直ぐに3口を手掛けて3口とも一回の焼入れで同じ反りとなり、7月半ばには完成させ東京に研ぎに出しました(写真17)。

7月30日、その内の1口に疵が出て不合格になったとの知らせを受けました。資料館に展示している元帥太刀が返却された作品です(写真18)。直ぐに3口の製作に取り掛かり、8月25日には完成させ東京へ送りました。この3口は無事嘉納となりました。これで安心と一息つくや、急遽6口の下命を受けました。予備1口と合わせ7口の元帥刀製作に取り掛かり、焼入れも終わり仕上げに掛かり始めた頃でした。俊秀の表情に変化が現れ異常



写真17 元帥太刀の押し型

な行動を取るようになったので10月21日に会社附属の病院に嫌がる俊秀を連れて行き診てもらったところ、即刻入院させられました。診断は脳腫瘍で29日の未明に帰らぬ人となりました。

11月5日付けで俊秀刻銘未済の元帥刀に関しては息子胤次が「俊秀謹作」と刻銘し、別に説明を付けずに俊秀在銘として今迄同様上納すること、右は宮内省用度課に於いて暗黙の内に了承済みと宮内省武富御剣掛より日本製鋼所の社長宛に通知があり、そこで残りの元帥刀に胤次が代わって刻銘を施し12月15日に荒身6口を東京へ送りました。それらも全て嘉納されました。ただ昭和18年(1943年)の下命なので使われていないものと思っていました。

平成になってから日本製鋼所の重役が所用で会津を訪れた際に日新館という会津藩校を復元した資料館で俊秀作の元帥刀が展示されているのを偶然発見しました。会津出身の畑俊六陸軍大将が昭和19年(1944年)6月2日に元帥を拝命し下賜されたと伺いました。その後、ご遺族と連絡を取って元帥刀、拵え、軍服など一式をお借りして全日本刀匠会北海道・東北地方支部の展示会を室蘭で開催した際に特別展として展示したことがあります(写真19)。最近、畑陸軍大将が入隊した時には函館に住まわれていたので軍歴にも北海道出身と記載されていて退役後に会津に移られたと伺いました。北海道出身ということで俊秀作の元帥刀が下賜されたのではないかと推測しています。



写真18 資料館に展示中の元帥太刀



写真19 元帥太刀の拵え

4. 二代目当主 堀井信秀

二代目当主は俊秀の長男信秀です(写真20)。本名を正光といいます。大正9年(1920年)3月22日室蘭に生まれました。

昭和9年(1934年)、日本製鋼所に入社して俊秀の下で修業に入りました。信秀は昭和16年(1941年)に兵役に服し、昭和20年(1945年)に復員して会社に復職しています。堀井家の出身が滋賀県だったために京都の連隊に入隊しました。その際郷里に挨拶に出掛けました。

昭和27年(1952年)、刀匠で衆議院議員だった栗原彦三郎刀匠の提唱でサンフランシスコ講和条約締結を記念して日本刀を製作し諸外国へ記念品として贈ろうと計画し、まだ日本刀製作が公には許可されていなかったにも関わらず特別の許可を得て全国の刀匠に呼びかけ多くの刀匠が賛同して作刀しました。完成して次々に栗原刀匠の元へ日本刀が届き始めた時に提唱者である栗原刀匠が急逝し、この話は頓挫してしまい、日本刀は全国の刀匠の元へ返却されました。日本製鋼所にも何口か現存しています(写真21)。



写真20 二代目信秀の鍛刀風景

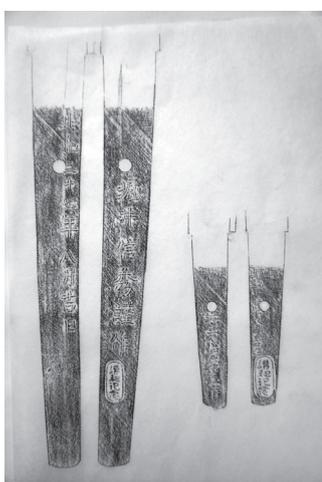


写真21 講和記念銘太刀と短刀

戦後は昭和30年(1955年)の再開でした。前年の昭和29年(1954年)に日本刀が美術品として認められ文化財保護委員会の許可の下に製作が可能となり申請の結果、昭和30年(1955年)10月6日付けで堀井信秀、胤次、渡部安秀の3人が正式に刀工として認可されました。昭和29年(1954年)の200日に及ぶ日鋼争議も終わり、会社に作刀の件で稟申したところ許可が得られました。昭和30年(1955年)の9月10日から11月8日の吹子祭(ふいごまつり)までの期間中に翌年春の作刀技術発表会へ出品する作品を作るためでしたが、兵役に服した空白期間のため苦労しました。

昭和36年(1961年)4月、信秀は銃砲刀剣類登録審査員に任命されました。

昭和49年(1974年)に北海道神宮が火災になり御神剣の一部が焼け身となりました。信秀は神宮の依頼により数本の再刃(さいば)作業をしました。その関係から神宮所蔵刀の整理が行われ再刃した刀剣を含む刀剣が研ぎ直されました。その手入れを信秀が担当していました。退職前にその仕事は胤匡に引き継がれました。

昭和51年(1976年)4月、信秀は日本製鋼所を定年退職してその後、伊達市竹原町に移住しました。9月29日敷地内に珠山麓堀井日本刀鍛錬道場を開設し作刀に専念します。移住当初、近隣の愛刀家の間で「武器講」を募り作刀でお返ししていました。その後も順調に受注製作を続けていました。

昭和59年(1984年)に伊勢神宮第61回式年遷宮神宝直刀太刀一口を被命し11月に納品、審査の結果合格しました。

平成4年(1992年)11月、永年に亘る銃砲刀剣類登録審査員を勤めた功績により勲五等瑞宝章を賜りました。

平成13年(2001年)3月23日、すい臓癌のため伊達日赤病院で逝去、享年81歳。

5. 三代目当主 堀井胤次

三代目当主は俊秀の次男胤次です(写真22)。大正12年(1923年)2月24日室蘭に生まれました。呼び名を重良といいます。

昭和15年(1940年)3月、日本製鋼所に入社し俊秀の下で修業に入りました。

10月、紀元2600年奉祝湊川神社神前鍛刀奉仕で一行に加わりました。昭和18年(1943年)10月29日の俊秀逝去後、宮内省の許可を得て元帥太刀に俊秀存命として代わりに銘を刻み納めました。

昭和19年(1944年)に兵役に服し昭和23年(1948年)に復員して翌昭和24年(1949年)に復職しました。

昭和30年(1955年)に兄信秀、渡部安秀の3人で瑞泉鍛刀所が再開されました。コンクールへの出品を目的とした、9月から吹子祭までの三ヶ月間の鍛刀所での作業

でした。その後半年間に延長されました。

信秀が退職し伊達に移住して鍛刀所を開設したのを機に通年作業となり受注販売を始めました。第一号の注文は室蘭八幡宮からの御神剣でした。

昭和54年(1979年)から瑞泉鍛刀所の管理・運営が北海道厚産(株)(現在の日鋼室蘭サービス(株))に移管されました。胤次は定年退職を迎え、北海道厚産に転籍し、後継者育成と鍛刀に専念することになりました。

昭和58年(1983年)に日本鉄鋼協会から一通の文書が届きました。昭和60年(1985年)に茨城県つくば市において国際科学技術博覧会が開催されるに当たり政府出展歴史館内の一角で古来からの先手による作刀実演をしてほしいとの内容でした。その当時、道内には帯広に木下俊春刀匠、伊達に渡辺惟平刀匠が居たので早速声をかけましたが自分達の師匠の許しが無ければとの回答を得ました。そこで急遽長野県の宮入先生のご息女と群馬県の大隅先生に手紙を認めお願いしました。両師匠からは快諾を頂くことが出来てその旨を両刀匠に伝え手伝って頂くことになりました。

その年の内に鍛刀所を再現するスタッフが来所し仕事場や道具類、火床、研ぎ場、仕上げ場などの採寸をして最低限の道具類も作りました。鞆(ふいご)は日本製鋼所の模型工場のOBの方をお願いしましたが、構造は簡単なのですが、細かな所に細工が施されていて納品時に「もう一台依頼されたら断る」と言われました。政府出展歴史館内に再現された鍛刀所は横座の右側が全てガラス張りであり地面が人の腰位の高さにあるので、鎚打ちして腰を下ろすと足元に観客の顔があるような位置関係でした。

昭和60年(1985年)3月の開会式の前日に皇太子殿下(現上皇陛下)ご一家の前で御前鍛刀を披露することになりました。予め1~2回折返し鍛錬をして待機し、我々の前に来られたタイミングで鍛錬を始めました。



写真22 三代目胤次の鍛刀風景

四人が一体となって相槌のリズムに合わせて練習した通りに鎚打ちして折返し沸かす作業を行いました。僅かにガラスの向こう側のどよめきが漏れて聞こえてきました。無事鍛錬が終わり、御一家が次の会場へと移動されてから、あのどよめきが何だったのかスタッフに伺うと現秋篠宮殿下が我々を見て同じ白装束で同じ動きをしていたのでロボットだと思われたらしく、説明役から「北海道の堀井刀匠達です」と説明されると「ロボットにも名前が付いているのですね」と発言されてどよめきが起こったと教えて頂きました。父胤次を含め全員が緊張した一時でした。

6か月の会期中、3月の開会式から1週間、7月に1週間、9月の閉会式までの1週間の合計3週間実演を行いそれ以外の期間は仕事場に道具類などを展示していました。最後の週で焼入れをして茎に銘を刻んでそれを祭壇に飾り、打ち納め式を執り行ない実演を終了しました(写真23)。研ぎ上げた一振りと鍛冶研ぎの状態の一振りの二振りがエキスポセンターに永久保存されていると聞いています。各1週間の実演期間中は時間割があって実演開始時間になると黒山の人だかりになっていました。期間中は会場周辺の5部屋ほどある一戸建ての住宅が割り当てられ、会場までは専用のバスが巡回していました。

平成元年(1989年)、北海道で「はまなす国体」が開催され各地で競技が行われました。サッカーが室蘭市入江のサッカー場を会場に行われ、高円宮殿下、妃殿下がご視察のため来蘭されました。その間に瑞泉鍛刀所にもお越しになられ御前鍛刀を行いました。その後胤次が陳列館を案内しました。妃殿下が家系図をご覧になって胤次と同年だったので、そのことを胤次に話しかけられたと言っていました。大門の前でお見送りをし大変緊張した一時でした。

平成14年(2002年)10月3日、日鋼記念病院緩和ケア病棟で逝去、享年79歳。

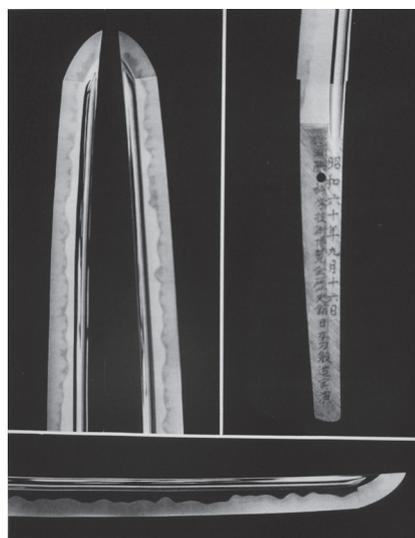


写真23 万博で製作した太刀

6. 四代目当主 堀井胤匡

四代目当主は胤次の長男重克で刀匠銘は胤匡です(写真24)。昭和29年(1954年)3月30日室蘭市母恋で生まれました。

小学生の頃から学校が終わると鍛刀所に遊びに行っては胤次と一緒に帰ってくるのがよくありました。

昭和47年(1972年)4月、日本製鋼所に入社しました。将来鍛刀所勤務になるということで熱処理課に配属されました。第一熱処理工場の炉番となり3交替勤務に就きました。その後、会社の人事で圧延から研究と異動しました。

入社当時は吹子祭のある11月から年明けの打初式が終わって1月末までの3ヶ月間だった鍛刀所勤務が途中半年に延長され、昭和51年(1976年)の信秀の退職により通年勤務となり受注販売を始めるようになりました。

この頃は刀匠の資格を得るには登録審査員3名の推薦が必要で札幌の稲村栄一先生、小樽の小林光先生、伊達の伯父信秀の3名に署名を頂き道庁経由で文化庁へ書類を提出して昭和54年(1979年)7月31日付けで承認されました。これを受けて父胤次から「胤匡」という刀匠銘を授けられました。

昭和56年(1981年)11月には伯父信秀、父胤次の出品刀の研ぎを担当して頂いて後に人間国宝になられた研ぎ師の永山光幹先生が主催する平塚市にあった研磨研修所に年に数か月入所して研ぎの技術を習得に行かせて頂きました。そんな関係から日本美術刀剣保存協会が主催する若手刀匠のための作刀技術実地研修会の第一期生として参加することが出来ました。3年で一期が卒業する制度でした。その一期生とは現在交流はありませんが、上京して顔を合わせると声を掛けてくれます。その中から現在の全日本刀匠会の会長などが輩出されております。

昭和60年(1985年)にはつくばの万博会場での貴重な体験も会社に居たため出来ました。

平成16年(2004年)の11月に全日本刀匠会主催の小品展において三匠会会長賞を受賞いたしました。



写真24 四代目胤匡の鍛刀風景

平成18年(2006年)から始まった全日本刀匠会主催「お守り刀展覧会」も第一期生が中心となって企画されたので第一回から出品しました。

平成30年(2018年)の吹子祭の神事後、当主交代式を行って佐々木刀匠に当主を譲りました。

7. 五代目当主 佐々木胤成

五代目当主は佐々木直彦で刀匠銘は胤成です(写真25)。昭和47年(1972年)9月23日札幌に生まれました。

平成5年(1993年)の春頃だったか、仕事をしていると入口に立っている若者が居て、入って来るなりいきなり「弟子にしてください」と頼みこんできました。父胤次が彼の話の聞きました。札幌在住で名前は佐々木直彦、高校を卒業して今は専門学校に通っている。子供の頃からナイフなどが好きで専門学校の先生から室蘭に刀鍛冶がいると教えて貰い来たということでした。父は「取敢えず会社に話をしておくので改めて来なさい」と一旦帰しました。

会社に佐々木のことを説明して再び佐々木が鍛刀所に来た時、総務へ連れて行って総務部長を交えて佐々木の想いを聞きました。同じ位の息子さんがいた総務部長から、「取敢えず大学だけ出なさい。その時まだ刀鍛冶になりたいという気持ちがあったら採用を検討しよう」と言われた佐々木は、室蘭工業大学に平成7年(1995年)入学しました。学生は休みが多いので春・夏・冬休みには鍛刀所に通って来て炭切りをしていました。会社も交通費だけは支給してくれました。

平成10年(1998年)に卒業して4月に入社、1年間の研修期間を終え11年からは総務に配属となり鍛刀所勤務になりました。本格的に胤次の下で修業を始めました。平成15年(2003年)には作刀技術実地研修会に参加し、引続き文化庁主催の平成15年度美術刀剣刀匠技術保存研修会に参加して無事終了し、文化庁より承認を得ることが出来ました。翌平成16年(2004年)の打初式で命名



写真25 五代目胤成の鍛刀風景

式を行い「胤成」という刀匠銘を授けて瑞泉鍛刀所は刀匠2名体制となりました。

平成17年(2005年)に室蘭工業大学の大学院へ進み、平成20年(2008年)9月に博士号を取得しました。

平成23年(2011年)から日本刀文化振興協会、全日本刀匠会並びに日本美術刀剣保存協会のコンクールに出品し、平成27年(2015年)の第6回新作日本刀研磨外装刀職技術展覧会において刀で銀賞二席、平成28年(2016年)には第11回お守り刀展覧会で佳作、平成29年(2017年)には第8回新作日本刀研磨外装刀職技術展覧会において刀で銀賞一席(写真26・27)、平成30年(2018年)には現代刀職展において短刀で努力賞を受賞しています。

瑞泉鍛刀所創設100周年に当たる平成30年(2018年)11月の吹子祭の神事の後に執り行われた当主交代式で五代目当主となり、今後も瑞泉鍛刀所を継承していってくれることと思います。

当主交代を機に、平成31年(2019年)3月には資料館内のパネルが初代当主俊秀から五代目当主胤成までの内容にリニューアルされ、それに併せて展示刀の一部も変更追加されました。



写真26 銀賞一席の賞状

※瑞泉鍛刀所および資料館は一般公開しておりません。



写真27 平成29年(2017年)銀賞一席の作品